

## 時間がない！

バスが混み出した。老女が乗って来たがだれもゆずらない。少し離れていたが、どうぞと席を立った。一瞬とまどったようだが「すぐ降りますから」とていねいに断られた。

なぜだろう？ 家で話題にすると嫁が言う。「その人、お父さんが自分より年寄りに見えたからよ」。まさかと言いつ返しした。しかし、衝撃。まだ若いと思つていても人目ではすでに老いていたのだ。今、はっきり老いを自覚する。老いの自覚は年齢でなく、何かをきっかけに突然訪れるようだ。

老いはすべてを喪失しゆく時代というが、老いを自覚するとき、見るもの聞くものすべてが新しくよみがえってくる。あの夕映え、この若葉、来年も目にするだろうか。ああ、美しい。

親しい人と再会すれば一期一会と愛しみやまぬ。まして遠い国へ旅立った二人の孫の姿をわが目に焼きつける。名作『銀の匙』に老伯母を訪ねた青年が「その小さな目

の中に私の姿をしまつてあの十萬億土まで持つていこうとするかのようにじっと見つめている」と。孫への思いは皆同じ。

私の若き主治医は別れ際にきまつて「頑張りましょう」とつけ加える。私も頑張る、あなたも頑張れ、ここには医の本質がにじんでいる。「五年は保証します」とも。それほど私は欲深くはないが、しておかねばならぬこと、学ばねばならぬこと、何と多くを残していることか。それにしても時間が残り少ない。旅立ちの支度、老いとは何と多忙の時か。はた目には何もしていない老いの日々と映っているかもしれないが。

(一九九三年五月二十五日)